

# 教学マネジメント×中期計画

## 「教学マネジメント指針」を “自学に落とし込む”ためのコツ

(株)ベネッセi-キャリア  
教育事業本部

**木村英司**

きむらえいじ ●2013年(株)ベネッセコーポレーション入社。高校教育支援に携わった後、2016年より大学の教育改革支援を担当。教学領域におけるPDCA設計支援を多数実施。



撮影／荒川潤

### 遠回りでも I から整えることが一番の早道

3つのポリシー、IR、学修成果の可視化…etc.。文科省から出されてきた数々の教育設計施策。これら全てのパーツをつないで収斂させ、方向性を示したものが、「教学マネジメント指針」です。そのため、まずは素直に I から順に自学の現状を俯瞰することが肝心です。しかし往々にして、とりえずⅢの学修成果の可視化用にアセスメントを導入するケースが多く、その場合、結果を報告して終了、その後の教育改善に結びつかないことが少なくありません。そもそもDP自体が達成度を測ること前提で作られていない、という大学が殆どです。中期計画策定を機に、思い切って見直す、もしくは、育てたい能力要件を別途策定してみてもよいでしょう。次に重要なのが、最終的にマネジメントサイクルを機能させるために、各段階で合意形成をすることです。納得感がなくⅢに進むと、「自分の科目ではこんな能力は育成していない」という

話になり、教育改善の歯車は止まってしまいます。ちなみに教学マネジメントは学位レベルで回すことが中心に据えられていますが、Ⅱの授業科目・教育課程の編成・実施を行う中で、各教員が学位のDPの中で何を担うのか自覚しやすくなったり、中には決めていてもどの科目でも育成していない能力があることが判明したりします。このように教学マネジメントは可視化までの過程こそが重要で、FDの実質化にもつながります。Ⅰ、Ⅱ、Ⅲが整ったら、エビデンスを基にしてFDへの展開、カリキュラム改定などを検討します。「エビデンスを基に施策が決定されていること」や「学修成果をデータで表し、それを基に教育を改善する文化があること」は、公表すれば、教育カブランディングにつながるでしょう。下の図をよく見ると、授業レベルの歯車が回ることで、学位レベルの歯車が回り、結果的に大学の歯車が回ることが表現されています。このように教学マネジメントへの取り組みは、大学の教育機関としての持続可能性を高める中期計画の要そのものなのです。

### 【図表7】「教学マネジメント指針」概要



\*文部科学省資料を基に作成